

身延山と本陽寺と林是幹師

上田本陽寺
宗會議員

小根沢義定

林是幹師が信州上田の本陽寺で産声をあげられたことは、林師の近親以外では余りご存知ではないのではないかと
思われる。

師のご母堂しげ乃自は元身延山執事太田日定上人の長女である。太田日定上人は身延山や金塚日梵師範及び法縁の
推挙で、明治三十七年六月山梨県東八代郡境川村晴雲寺から身延山とは深い関係を持っている信州上田町本陽寺へ瑞
世されたのである。

本陽寺は妙栄山と号し、文禄四年（一五九五）信州小諸城主仙石越前守秀久侯の正室本陽院殿の開基により、不受
不施派の大乗院日達上人を開山として小諸に開創され、江戸碑文谷法華寺に属したのであるが、爾来三十年足らずで
大坂夏の陣の後、元和八年（一六二二）仙石氏上田城主への移封に従って上田城下の鍛冶町（現在地）に再建立され
たのである。

然しながら程なく不受不施の法難に遇ったのであるが、仙石家の法華信仰の持統と当山の法灯を絶やさぬために、
仙石侯は身延山に対して非常に熱心に三願の礼を以って住職の任命方を懇請したと伝えられているが、身延山もこの
熱意に応じて寛文五年六月（一六六五）時の二十八代法主日眞上人は弟子の武井坊第十二世正行院日速上人（身延山

記録武井坊歴代住職の項に記載あり、当寺伝によれば身延の学頭職であつたと云う。）を本陽寺中興開山たらしめ、身延直末に列したのである。

日遠上人は本陽寺に住してから、正行院を興元院と改め在職四十余年の長きにわたって仙石侯及び家中町内檀徒に尊崇せられて、化導の全きを得、紺紙金泥の法華經八卷（現寺宝）を残されるなどして、宝永五年（一六九二）八十才で遷化せられたのである。而うして爾来本陽寺はこの地方（信州の北部）の触頭として重きをなして祖山に仕え深い関係を保持して明治期に至つたのである。

明治期になつて、明治六年六月第十二世潮生院日祐上人は招かれてお山に出仕し、延山第七十三世獅音院日健上人偶々大阪御巡教中、法主代理として身延山開闢第六百年記念法会の導師を勤められ、為山尽粹の法勞を以つて身延山第七十三世准歴に推されたのである。

次いで当山の第十三世と十四世の間にあつて、市川日調上人は所謂一六兩条の問題紛糾に連座して、本山竜口寺山主を貶せられて当山に謫居在住四年に及んだのであるが、その間「わしは謫居の身であるから」と云われて、庫裡の座敷にお住いにならず、位牌堂（当時疊敷き）に一家がお暮しになり、傘張りなどをしながら——この話は、先年瑞輪寺で調上の第三十七回忌法要の砌、調上の娘さん（当時九十余才嫗）と大船の中村鍊敬老師から承った。——荒廃しておつた寺域を復興し、旧上田城の玄関及び書院を当寺に移築（明治二十年後半）するなど内外の整備を行われて当山の今日に至る法灯継承に偉大な足跡を印されて後に身延山第八十世に榮進せられたのであるが、調上は住職以上の大いなる功績を残されていたにもかかわらず、自らは当山の世代に加わらず寺務取扱と記録に記される程大變謙虚で居られて今更ながら奥床しくそのお徳が偲ばれるのであつて、私は調上は当山の大神人と確信しているのである。

身延山と本陽寺とはこの様な關係であつた所へ、冒頭記述の様に、法華淳厚たる太田日定上人が第十六世として当山へ晋山されたのである。

日定上人は大正八年法嗣義山日敬に後職を托して身延山に出仕するまで十六年間在任されたのであるが、日調上人の寺務取扱中或る程度の整備復興はなし得たものの、第十四、十五世はいずれも在位僅少で継統の実をあげ得なかつたため、再び寺門は荒弊し始めようとしていたが、檀信徒の教化布教に意をそそいで、御会式や大祭（三十番神と子安鬼子母神——現在ではこのお祭を、おばんじんさん又はざくろ祭と呼ばれて、当市では信濃国分寺の八日堂縁日に次ぐ賑やかなお祭となっている。）を定着興隆せられ、又番神堂・鬼子母神堂の再建を企画して一千人講を組織するなど寺門の充実に心魂を傾けられると同時に、林義静、小根沢義山、砂長義海など有為の人材を弟子として育成し、林師は上田妙光寺を経て甲府市外（現市内）住吉安立寺に、小根沢義山は法嗣として本陽寺を継がさせ、砂長師は自らの前住寺たる山梨県東八代郡境川村晴雲寺にそれぞれ住職させたのである。

この林義静師に日定上人の長女しげ女が嫁しての第一子が林是幹師であつて、今から七十一年前にしげ女の里方である本陽寺の太田家で呱呱誕生されたのである。

太田日定上人は法嗣小根沢義山が日蓮宗大学を卒えるのを待つて、法華淳厚当時から年来の素願である祖廟中心の信念に徹するために、寺を義山に譲り、自らは一介の法師の身に甘んじて身延山に出仕し、やがて教学部執事、晩年は祖廟法務所執事として、その生涯を名利榮達の外にあってお山に奉仕し終つたのであるが、法嗣義山は布教及び社会事業に東奔西走の活躍すると同時に宗務所長、宗会議員として宗務宗政にたずさわり又身延山門末議員更に日布上人によつて常置會議員に特選されるなどいよいよ身延山のために奉仕し、お尽くししようとした矢先に病を偲て

昭和五年三月不惑を越えること僅か三才で遷化したのである。

時に当山は一瞬暗黒となったのであるが、全檀徒、法類、組寺の一致した懇請もだし難く、日定上人は再住して十八世となられたのである。この時私は未だ数え十二才小学四年の終りであった。日定上人は孫にあたる私を本陽寺の後とりの弟子として養育を始められたのである。父は遷化に先立つ一ヶ月程前、再起困難を覚ったのか、身延のお師匠さん（日定上人をそう呼んでいた）と法類総代の甲府信立寺の塩田義遜師に依頼して、私にお経のお師匠さんをつけて呉れたのである。父は病臥するまでに序品から神力品までは一応稽古をつけていてくれたのであるが、私が今日大した間違いもなくお経を読めるのは、私について下さったお経の師匠今村恵上人のおかげである。今村師こそ私の読師であって忘れ得ぬ人である。

日定上人は当山に再住されてからも、常時は身延山に勤住されて居り、上田へ帰られるのは八月のお盆の頃一週間位と十月の御会式の時の数日間のはかは特別の法務が出来た時位であったが、既に六十代の後半になって居られたので、私に対しては師匠と云うよりむしろ祖父と云った温かい愛情で大変可愛がって下さったのである。当時の私には師匠がかったの筆致言論の鋭い法華醇厚とは到底想像もされなかったものである。老境の師匠は仙風枯淡の味のある老好人物であったが、時にそのやさしい眼差しに鋭い光が一瞬輝く時もあった。老境の師匠は殆ど口で多々云々することはなく、教えておかなくてはならないことはいずれも一綴の文章にしてその都度書き送ってよこしてくれたものであって、林師もこの点は祖父によく似ているのではないかと思われる。

日定上人は私を立正の予科へ進めさせると間もなく健康を害されて、甲府市外の住吉の閑居で療養されていたのであるが、この頃から是幹師と私は親しく顔を合わせ又口をきく様になったのである。当時林師は既に立正を卒えられ

て身延の学院にお勤めになり始めの頃と思うが、私は未だ予科の二年を終ったばかりであったので、もちろん対等のつきあいではなく、大きなお兄さんとして一方的に私の方が可愛がられたと云った状態であった。こんな事情からは幹師が端場坊の住職となり、短大の教授となり、お山の経理そして庶務部長又は宗会議員とられて年と共に大きく且つ重厚になられても、公的には先生或い部長さんとしてけじめはつけているものの、心情的には相い孫としての兄貴と云った様な親しさと敬意をこめたものが内に秘んでいることは偽りない所である。こんなことから師には公私にわたって大変御指導を頂き又御厄介になって居って、昭和四十三年位牌堂の改修落成式には記念講演をしていただいたり、昨五十三年六月には御遠忌事業の客殿庫裡が落成しての第七百遠忌報恩法要には大導師をしていただいたのである。

林師は名実共に身延の人ではあるが、私は同時に師は信州で生れた信州人であって、私や私達北信寺院のよき指導者、重厚な先輩そして偉大な仲間だと思っているのである。

齢七十、現今では稀ではなくなりました。しかし一つの節目であります。どうかいよいよ御自愛あって、宗門のため、お山のため法令ますます長久ならんことを心から願っております。

筆者紹介

小根沢義定、上田本陽寺住職、立正大学卒、現宗会議員、師父小根沢義山師は「こね沢義山」と別称された如く、祖山常置会議員、又宗会議員として、談論風発正論の士として当時有名であった。将来を嘱望されたが惜しくも昭和五年三月、四十三才を以て遷化された。

(林 是幹記)